

# 創刊一〇〇巻記念座談会

津守 真

本田 和子

田代 和美

## 当時の編集会議は――

田代 いよいよ『幼児の教育』が一〇〇巻という節目を迎えました。二年ぐらい前から一〇〇巻になったらたぶん何かすごいことをしなくてはいけないんだろなということを思いつつも、結局バタバタと毎月毎月作るこ

とに追われ、気がついたらもう一〇〇巻が来ていました。何か派手なことをするのもこの雑誌としては何となくそぐわないし、少しずつ何かしらを一〇〇巻の節目に入れたらいい、先代・先々代の発行人の先生方に力をお借りすることになりました。今までのこと、そしてこれからこの小さい雑誌が二十一世紀に一体どういうことがで

さるのかなどを考えていくため、お話を伺いたいと思います。今日はお呼び立てして申し訳ありませんが、宜しくお願ひいたします。先生方が主幹をなさったのは何年聞くらいますか。

津守 ちよんど三〇年ぐらいですね。

本田 私が一〇年ぐらいですか、津守先生の後だけですから。

田代 そうすると一〇〇巻のうち、もう後半の四〇年。私ももう六年やりましたので、約半分は三人で。

津守 三人で約五〇年でしょ。

本田 そうですか。じゃあ、倉橋先生が半分近くですか？ 四〇年以上……。

田代 一時、いろいろな方が主幹になっていらつしやる時がありましたね。その間はわからないのですが、でもお二人の先生方で約半分ということで、その当時のお話や印象に残っていることや苦勞したことなどからまず色々とお話を伺おうかなと思つています。津守先生よろしいですか。

本田 津守先生は、お若い時からやつてらつしやいましたよ。

津守 そうですね。何しろ雑誌は毎月、毎月出さなくてはならないから、それに追われますね。思ひ出すといふとまずそれが第一。それからこの間、ちよんど一〇〇巻一号に、倉橋先生から受け継いだ時のこと、東基吉さんのこと、それともう一つ足して、現代のトピックの教育基本法の改正に関わるこの雑誌のことを書かせていただいたんです。本当に一〇〇巻を迎えるなんてね。一〇〇巻のことで座談会やるなんて、そんな日があるということ、僕は実感として考えたことがなかつたです。そんな日が来るなんてことを。よくまあ、続いたと思ひますね。

本田 そうですね。

津守 それは、こつやつて、代々こりや大變だと思つて続けてくださつて方がおられるのはありがた



いことだし、ご苦勞なことです。それからそれを助ける編集の方々、一体もう何人の方が編集の実務をされたか。十人は超えるでしょうね。そういう方が献身的に、という言葉があたるくらいなされたことと、さらにフレール館が、かなり損得を度外視して続けてくださったこと。これは倉橋先生の頃からの、フレール館とのつながりなんですよ。それで人によっては、フレール館とこの雑誌の編集との間に、何か癒着があるんじゃないかということは何回か直接間接に聞かれたこともありました。そんなことはもちろん一切なくって、全く無報酬で我々が編集して、そして編集実務の費用は通常の編集費には満たない程度の額で、みんなで寄ってたかって作ってきました。フレール館の力は、大きいと思っています。

本田 一時、編集者が入ってらした時期がございますね。畑さんという方が。

田代 フレール館の編集の方が？

本田 ええ。入って手伝って、ちょっと短い期間でし

たけど。結局こちらに任せただけがいいということになつてお引きになったんでしょうか。

津守 とても、我々だけじゃできないから、専門の人を入れてくれて言つたんです。ほんのわずかな期間でした。それが専任で編集を手伝ってくれる人を入れたそもそも最初のしょうか。

本田 そしてその後、池戸允子さんとか、木原薄子さんとか、院生の方などがお手伝いすることになったんです。その後、井上直子さん、それから、赤間峰子さん。

津守 水田順子さんも三年くらいなされたでしょう。

本田 そして皆川美恵子さんがかなりお手伝いして。

津守 まだ抜けてる人があるかもしれないけど……。

本田 この方たちが編集のお手伝いをしていた。じゃあ、畑さんの前は、倉橋先生は、附属幼稚園の先生とやつてらしたんですね。

津守 そうです。菊池ふじの先生が主にやつておられました。その前は、新庄よし子先生もかなりやつておら

れた時期がありました。でも菊池先生が主だったみたいですね。僕が編集をやるようになって、菊池先生は、手持ち無沙汰になられたような感じがありました。

田代 編集会議というのはどういう形でなされていたんですか。

本田 最初は幼稚園でやってらしたんでしょか。

津守 最初はね、キングダーブックの大塚さんという編集者の方などが編集会議にでていました。それが及川先生はちよつと気に入らなかった。この雑誌は倉橋先生の個人のものじゃない、これは大学のものだと言張されてね。これはもうほとんど、先生の晩年でしょ。それで、最初の会に、私も出るようにと言われて、僕は倉橋先生と親しかったから、倉橋先生もとても喜んでね、まあそういうことです。

本田 そうですか。では津守先生はアメリカから帰国してすぐから編集には参画なさったんですね。

津守 それが昭和二八年一月。倉橋先生の自宅で、もう倉橋先生は寝たり起きたりという感じでした。

田代 津守先生の代になられてからの編集会議の持ち方は、やっぱり変わっていったのでしょか？

津守 倉橋先生がご存命中は、倉橋先生のお宅に伺ってやりました。亡くなったあとか、亡くなるもうちよつと前くらいからは……。昭和三〇年に亡くなったのでその号を出すためには、昭和二九年ですよ。その頃から及川先生の園長室に僕が出かけていって、毎月やった時期があります。

本田 編集主幹が及川ふみ。編集主任津守真という時代ですね。

津守 そうです。

本田 ただし、編集兼発行人はすぐに津守真になります。

津守 うん、倉橋先生から僕の名前に入れ替わったんで。

本田 そのあと附属幼稚園の園長が載るような時期



がございませんでしたか？ 坂元彦太郎とか周郷博とか。

津守 ええ、坂元先生が、自分は園長だから津守さんは雑誌の編集をせよと言われて。

本田 あの方々はというご身分で載ったんでしょうか？

津守 それは、園長。

本田 園長で、編集委員？

田代 編集協力委員として、波多野完治先生たちが載っている時期もありますね。

本田 それはちよつと前ですか。

津守 ちよつと違います。それはヌースからの続きです。倉橋先生が戦争直後にヌースという欄を作られ（ギリシャ語で「ヌース」は「理性」という意味です）、それを書く協力委員というのを六人作られた。牛島義友、及川ふみ、斎藤文雄、それから多田鉄雄、波多野完治、山下俊郎。

本田 わりと巻頭言をよく書いてらした方たちですよ

ね。あの頃は結局、附属幼稚園長と津守先生が主でいらして、私がちよこちよこ口をはさんでという形になっておりましたよね。

津守 本田先生は、何年にお茶大に来られたのですか？

本田 昭和四五年くらいじゃないでしょうか。一九七〇年。

津守 昭和四五年ですか。昭和三〇年に倉橋先生が亡くなつてから、僕がこれを引き継いだのが昭和二八年の一月からだから、一五年以上あつたんですね。

\*

本田 あの頃、中教審でしたかしら？ 先導的試行案というのを出して騒いだ時期がございましたね。そして、中教審の委員だった方たちをお呼びして、座談会か何かしたことがあって、私たちの考え方は保育にしても保育研究にしても、古いんじゃないかって批判されたこ



とがありましたでしょう。えーっと、誰か中教審で活躍してらした心理学の方をお呼びしたんですね。その時に、現場を尊重して現場から理論を作り上げるみたいな考え方は結局、言葉の意味の理想であって、そんなことしていたら現場は少しも進歩しないというようなことを、わりとはっきり言われたことがあるんです。そして、そこに来ていた他のメンバーの方たちが一斉に反発してね。清水エミ子さんとか、清水光子さんとかね。保育に古いとか新しいということはない、と一斉に反発されたのを覚えてるんですよ。私、なるほどこういう思想はこのお仲間には浸透してるんだなと思ったことがあります。

**津守** そこは現場の保育の強さですね。誰もそんなこと言わなかったって、保育の実践では、「真は新だ」という誰もが自ずから考えるものがあるから。そのおかげでその上に乗っかって保育の答えが出るんじゃないかしら。

**本田** あと、倉橋先生からのメモというので、七項目

くらい何か書いたものが見つかったりしたのがありましたね。

**田代** 津守先生が前に書かれてたのがありましたね。

**津守** この間、一〇〇巻第一号に書きましたけれど。

**田代** これは、取っておかれたらいいですね。これは先生がお書き写しになつたんですか？

**津守** 僕が出席した最初の編集会議のときにメモをして、家に帰ってからオニオンペーパーに書き直したものです。(一〇頁写真、一一頁かこみ参照)

**本田** これは写真かなんかに写して載せたい感じですね。『幼児の教育』は保母を対象としており、保育の根本を理解させ、その精神を鍛えることを従来からの方針として……

**津守** それは清書したんです。僕ね、とつてもこういうメモ取るのは、へたなんですよ。これは、一番最初のときですね。

## 昭和三〇年以降の保育の変化

田代 先生方の研究室に残されていた『幼児教育』とか、『保育の手帳』、それから、『保育』、『月刊保育』など……。あれは何年分くらいだったか、かなりたくさん昔の雑誌がありました。

津守 そう、ひかりのくにとそれから……。

本田 チャイルド社。ひかりのくには大阪ですね。

津守 城谷さんが編集していたのが、今の『月刊カリキュラム』だと思います。

田代 『保育』と別ですね。

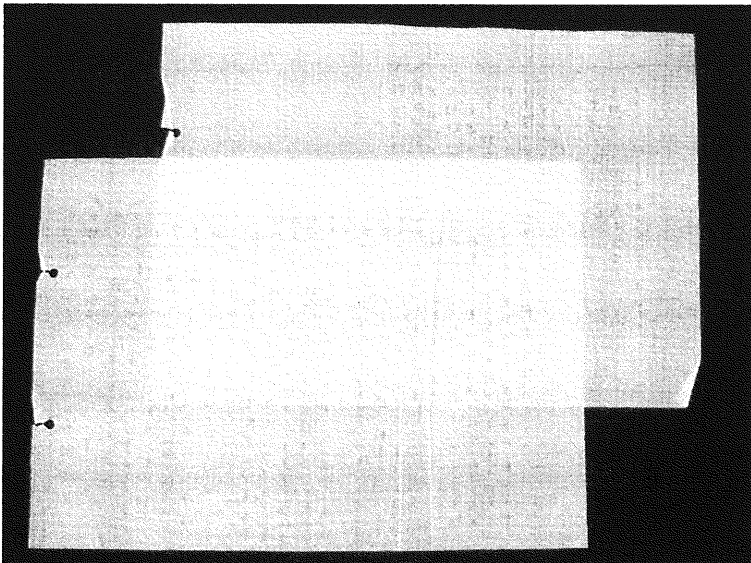
本田 『保育』と『月刊カリキュラム』がひかりのくから出でて、それからチャイルド社から『保育ノート』っていうのが出たのかな？

田代 はい。

津守 ああいうのはね、昭和三〇年代ですよ、だいた

い。  
本田 そうですね、戦後パーッと出た雑誌ですね。そ

◀「幼児の教育」編集方針について（津守氏のメモ）



## 「幼児の教育」編集方針について

十一月五日 倉橋邸にて倉橋、及川、津守が集り及川、

津守は、倉橋と協力して「幼児の教育」の編集をする事を、非公式に談合し、以下の如き結論を見た。但しこれを、原案であつて、今後更に検討を要するものである。

一、「幼児の教育」は、保姆を対象としており、保育の根本を理解させ、その精神を伝える事を従来からの方針としてゐる。従つて他の同類の雑誌の如く保育の技術的面のみに大きな力を注がず、独自の立場をとつてゆく。

二、日本幼稚園史の資料の意味で、廿九年度を通して、各地方の幼稚園の今昔をとり上げる。従来入れて来た保育界の今昔は、名古屋、愛知県、岡山県、京都市、長崎の各地であり、九州大分、兵庫県、福島県、静岡県、広島県、山梨県、長野の各地が依頼出来ると思われる。

三、幼稚園の先生としての根本問題で、遠く保育に関係があつて保姆にふわりとした感じを與える記事を入れる。この場合、心理学者ではなく、社会の各方面の人を取り入れる。例、柴田みなを、澤柳大五郎。

四、文学的讀物を入れる事、例えば、松原至大氏、但し、顔ぶれを適當にする事が必要である。

五、母親が分る程度の講座を入れる事、例、稲垣氏、栄養、矢部氏、被服論等。

六、又ースは協力委員が交互に執筆する。

七、倉橋先生の保育考を出来るだけ多くとり入れ、幼児觀を徹底させる。

八、日本保育界の發展及び、保育研究の促進のため、實際家、幼稚園専門家、心理学者、教育学者の協力の下に、保育界の問題及び、保育理論の研究の項目を入れる。實際家の声を反映させ、研究者との協力の下に、解決を求める。

また、保育に関する発表機關とする。特に、お茶の水幼稚園及び児童科研究室の協力研究を定期的に発表したい。これについては、今後特に熟考検討を要する。

九、寄稿は検討の上、出来るだけとり上げる。

十、歸朝者即ち、戸倉、斉藤、森脇先生に早く依頼すること。



の中では、ひかりのくにが一番古いんです。戦後出た雑誌では確かあれが一番老舗なんですね。ただそれ以前の大老舗がフレールベル館だからなんてよくむこうの人は言っていましたけどね。

田代　そういう雑誌に対して何か意識があったんですか。

津守　それはね、僕はありましたね。あつたという感覚。雨後の筍のようにいろんなものが出たのが、昭和三〇年から三五五年なんです。それで、その編集委員になつてくれとか、書いてくれとか言われたけど、僕みんな断っちゃつた。そういうのは『幼児の教育』と違つて、みんな、その月の材料をどうするかつていうような話が主でしょう。だから『幼児の教育』はそうじゃない、もつと基本をやり続けるという倉橋先生からの、そういうのがあるからね。比較したら面白いだろうと思えますよ。向こうの雑誌の方が、その時々、時事問題が、出てきますよ。こつちはいつでも同じこと言つてね。

本田　ただ、木原さんが言つてらしたんだけど、向こうはハウツーでね、明日何を教材に使うかというのが出てくるから若い人が飛びつく。それと同じことをやる必要はないけど、『幼児の教育』だつて、昔を紐解けば、ちゃんと教材が大切だつていうことを、「発刊の辞」にうたつてますでしょ、『婦人と子ども』に。だからもうちよつと洗練された、教材の定義の仕方はないかと彼女は考えて、「ねえ本田さん、何かいい知恵ない？」なんていつてらした時期があつたんですね。だから、教材つていうかハウツー一辺倒でいくのとは違う形で、現場的なもの、マニュアルでもない、教材でもない、何かないかなつて、模索されていたということでしょうね。

津守　それは倉橋先生も非常にしつかりね。話がちよつと、また歴史のほうに戻るけれども、東基吉の次が倉橋惣三でしょ。僕が『幼児の教育』を創刊号からもう夢中になつて読んで、読破してた時期があるんです。あれをずっと見ますと、倉橋先生のあの四〇年間は『幼

児の教育』の黄金時代ですね。その時代のものは、必ず手技があり、お話があり、唱歌があるでしょ。そしてその中心が誘導保育のテーマでしょ。誘導保育のテーマのところでも最初にボンと出てきたのが、及川先生の「八百屋遊び」、それから菊池先生の「人形の家」。徳久さんの「自動車」。新庄さんの「旅へ」。あの辺で誘導保育が形を成してくるところというのが、非常に面白い。それがこの雑誌の、東基吉を第一のピークとすれば、第二のピークですね。誘導保育というのを僕が面白い面白いと思っただけで、何となくかしてもっとやりたいと思っただけで、昭和二九年頃だったと思うんですけど及川先生が、北海道のトラピストで作った動物のぬいぐるみをごっそりともらってきた。それを使ってね、誘導保育をやりたいのでその研究をしてくれないかと言われて、堀合先生のクラスで僕がその記録を取り、「動物遊び」というのでやったんですよ。そして、それから続いて堀合さんがまた幾つか誘導保育を一生懸命やって、僕も本当にあれば何をやってたのだったのかということに興味があ

があつてね、もうくつついて回ってそれを研究しました。一生懸命見た。誘導保育と言つても、テーマがあつても、毎日の保育が主なんです。その中にほんのちよつとずつ、動物遊びとかおもちゃ屋さんとかを、散りばめていくわけです。毎日の生活のほうが、主なんです。子どもが朝来て、そして遊んで、ぶらぶらして、その途中でリレーをやつたり、かくれんぼをやつたり、砂遊びをやつたり……。今と同じですよ。そういうのをやっている中に「ちよつとちよつとあなたもう終わったの？」とか「ちよつと作つてやってみたら？」なんて言つて、そういう形で三々五々、子どもがそうやってはまた元に戻つていくということがだいたい一学期じゅう続くんですよ。それを見ていて、誘導保育というのは、ただテーマをつけるだけじゃな

いっていうことが、よくわかつてね。そして、見直してみると、及川先生のも菊池先生のも新庄さんのもね、



みんな同じなんですよ。だからこの誘導保育のテーマについていうのは、あの時期に黄金時代を迎えて、その後にはずっと尾を引いて、これがこの雑誌の一つのテーマだったんじゃないかしら。

本田 そうでしょうね。一九三〇年から一九六〇年くらいまでは非常に誘導保育の時期ですよ。その後、一九七〇年くらいであれば少し、ぼやけていくというか、テーマが消えていく時期なんです。それで、私なんかはその時期にちよつと立ち会つてるところがあつて、堀合先生が「もうこれ無理だわ、引っ張つてる」という自覚をなさつた時期があるんですね。あるとき、空き箱に色を塗つてレンガをお作りになつて、レンガのおうちを作り始めました。ご自分がせつせつとして、子どもが寄つてきて参加し、始めるのがきつかけになるんですよ。それで、何かせつせつとやつてらして、ああ、レンガのおうちをお作りになるんだなと思つて拝見したら、ある時点で堀合先生がそれをおやめになつたんです。

津守 それいつ頃ですか？



本田 和子氏

本田 私がお茶大に来て間もなくですから、七〇何年の頃ですね。毎週欠かさず附属幼稚園に行つた頃で。それで私は、どうして途中でおやめになるんですか、あれもう完成なんですかって聞いたら、「変だと思わない？ あの人たちは、先生が何かやつてるから、かわいそうだから少し手伝おうかっていう形で、手伝つて。前の子どもは、何かちよつとしたきつかけで自分からそういうことをやるうつてなつて、ムンムンと湧いてくるものがあつたけど、何かこの頃の子どもつてそうじゃないのよね」つておっしゃつて、「とすれば、私がこ

うやってやるのが無理に子どもを引っ張ることなのか  
など思っつて。ちよつとこういふのはやめて、子どもがす  
ることにむしろこつちが入つていく。だから私の頭の中  
からテーマとかそういうのを全部捨ててやってみようか  
と思ふのよ」といふようなことを言つていらした。たぶ  
んそれがその頃なんです。ただし公立幼稚園では、逆に  
一生懸命やつたでしよ。いろんなところに何うと、公立  
では、テーマを作つて一生懸命華やかに大きな何かを  
ね。

田代 大きな、大がかりなものを作つて。



津守 真氏

本田 それで私が「堀合先生がおやめになろうとして  
る時期に公立で盛んになつてるのはどういふことかし  
ら」つて言つたら、「子どもがかわつちやつた。ある種  
のお膳立てをすることによつて、子どもの自発活動が  
ぐーつと盛り上がつてくるような時代が、終わつちやつ  
たんじやないかとちよつと寂しい思いを持つてるんだけ  
ど、他の公立の先生はそういう感想おありにならないの  
かしら、子どもの見方の違いかしら」とか、そんなこと  
を言つてらした時期があつたんです。今はもう、いわゆ  
るテーマ的なものは、個々の活動への援助つていふ形に  
なつてますよな。

津守 その頃の記録を丹念に取つたのが磯部景子さん  
なんですよ。その、テーマがどこまでか、そして日常の  
保育が、どうなかつて、そこを磯部さんは本当に丁寧  
に記録を取つた。梶田正子さんも手伝つたんじやない  
かな。

本田 そうですね。磯部さんと、私は入れ替わりなん  
です。磯部さんがお茶大をおやめになつて、私が入つて

きますすでしょ。だからちようど、磯部さんがやってらしたことのあとを私が見始めたという感じ。附属幼稚園を丁寧に見始めたのは、その頃でしたね。

**津守**　そしてその黄金時代の誘導保育が、何であれだけてきたかと言うと、それは先生が夢中になってそれな夜も昼もそのことばかり考えてやってくる、その情熱なんですよ。徳久さんのもの、新庄さんのもの。「旅へ」の時も、夏休みにあの人たち東京駅に行つて、駅長さんに頼んで改札係の中まで見せてもらつて、そのパンフレットもらつてきてためて、子どもが来るのを待ちかねててパンフレットや広告類や、そこから切符の使い切つたやつを出すんですよ。それでその情熱に子どもが駆られるんでね。それ無しでは、あの誘導保育というのはなかったと思う。戦後昭和三〇年頃、単元保育という名前で公立幼稚園がそれをやるんだけど、その時の単位は一週間です。第一日目―導入、第二日目―なんとか。そして、だいたいもう一週間か一〇日で完結して次のテーマに入る、なんてもう無理なのわかつてるんですよ。四谷第三

幼稚園で相馬誠子さんが、その単元保育の研究つていうのを三年がかりでやるから、研究講師になつてくれないかつていので行つたのが、私が公立幼稚園の研究会の指導講師をやつた始まりだったんです。

**本田**　そうですか。

**津守**　それで変だ変だと思つて、お茶大の誘導保育とその単元保育とはこういう風な点で非常に根本的な違いがあるつていうことを、相馬さんに言うつと、相馬さんわかつたのね。そういうことがずつと尾を引いて、今でも公立幼稚園はそういう向きも多少あるのかな。

**本田**　多少ありますね、単元みたいなものが。でも、それが悪いというんじゃないけど、子どもを急いで引つ張つてらつしやるような感じが無きにしても非ずですね。

**田代**　逆に言えば、遊びつてというのが重要視されるために、自分たちの持つている遊びの形とかイメージがどうしても先行してしまい、すごく素朴なことをやつているのをゆつくり見て楽しめない。なにになにごつこと名付けられる形にしたいつていうのを感じますね。

本田 そうです。ね。ちょうど堀合先生が、誘導保育のテーマを解体し始めた頃が、津守先生が変なことを面白がり始めた時期なんです。子どもが石をこするとか子どものやつてる小さなことの意味みたいなのが、逆に浮上してくる時期なの。一時間石をこすってる子どもがいたって、すごく喜んでいた時期なんです。

津守 そうそう。

本田 観察なさる側の变化っていうのもあるんです。ね。附属の保育というのは観察する人とのダイナミズムなんです。だから津守先生が石けずりとか、地面こすりにあれほど熱中なさらなかったら、また変わったかもしれないですけど。あれは何故ですか。ああいうことに熱中なされたのは。

津守 あれ、科学的研究っていうのに対する疑問ですよ。ね。

田代 全部それが重なるんですね。先生たちの変化と幼稚園の保育の変化が。

津守 あれはね、本田先生がみえてから後なんです。

ね。だから昭和四四、五年かな。それで僕は、いわゆる科学じゃない学問、科学っていうのは何かっていうので、まずユングに取りついて（翻訳もほとんど出ない頃です）、それから現象学のフェルメールさんについてた。それでそうやって非科学的な科学の学問を勉強し始めて夢中になった。レンガをこするのはレンガをこすること自体じゃない。一時間もかかってわずかおさじ一杯くらい石の粉を作ってお菓だと言う、あの情熱なんだ。細かい砂は、子どもの情熱のかたまりだって言うて。

本田 あれで子どものすること一つ一つを丁寧に見るとか、丁寧に掘り下げるってことの意味が逆に現場で再確認されたことがあって、テーマの解体にそれが力を貸してるところもあるんですよ。ね。テーマみたいなもので引つ張るんじゃないで、その石けずりでも泥こねでも、そこから考えていくこ



とがいつばいあるんじゃないか、っていう方向に変わっていく気もしますけどね。

津守 それには周郷さんの詩的な考えもあって。僕は周郷博さんの話が非常に面白く、現職研究会でいつも周郷先生に、頼んで話してもらった。あの人は、ギリシャ哲学の四原則っていうのをいつも言ってたからね、火と水と土と風と、って言って、「石をけずるっていうのは、火だ」って。

本田 その後の附属幼稚園の展開は、田代さんのほうがよくご存知ではないですか。

田代 もっとだいぶ後です。私は堀合先生の保育は全然見たことがないんです。

本田 ああ、ご存知ないですか。

田代 堀合先生の頃の雑誌というのは。

本田 堀合先生自身は編集委員の一人として協力をさったかもしれないけれども、むしろ、津守先生の強力なパートナーとしてのご活躍ですね、雑誌の上では。もう一人いらっしやいましたね。

津守 村井さん。それから村田さん。守永さん。堀合さんが一番その黄金時代の誘導保育の伝統を意識していた。そしてあの人は、本質論にちゃんと耳を傾ける人なの。今本田先生が言った、誘導保育はほんとに引張ってる保育だって気がついたところから堀合さん自身が変わっていく。なかなかラディカルなところがある人なんです。それで、その他の先生たちも、みんなそれぞれなんですよ。

本田 それが附属の面白さでもあったんですよ、それぞれで。

田代 子どもが変わったというのは、本当に変わったんですかね、そのあたりで。

本田 変わったのかどうか。堀合先生は、子どもが変わったって言って言ったらしたけど、でも子どもが変わったといっても、子どもだけが単独で変わることはないですわね。堀合先生がお変わりになったのと、やっぱり相乗関係じゃないかなと思う。「子どもが変わったわ。熱気を持って盛り上がらない。今の子どもに必要なのは自分

のやり始めたことをじっくりとさせてあげることかもしれない」って言っていらつしやるのがちょうどその、石けずりの時期なんです。だから、ああ、これは相乗効果かなと思つたことがあるんですけどもね。

**田代** そう感じるのもまた、聞いただけではなくて子どもとの関係の中でご自分で。

**本田** ええ、子どもとの関係できつとね、あの方、キヤッチする方でしょね。

**田代** そう思うといつの時代も子どもはこう変わったといつて、自分の見方が変わるたびに今必要なのは、つ



田代 和美氏

ていう風に考えていく。それは保育者自身の側の変化ですか？

**本田** そうでしょうね。だからそういう意味では言っちゃえは変わらない、いい関係を……。

**津守** ずつとこう、歴史を考えると昭和三〇年代からの、僕が知ってる時代から子どもは変わったといえは変わったし、変わらないといえは変わらないんだけど、今、この現代を考えてみるとね、子どもが変わったかどうかというよりも、社会全体がひっくりかえっちゃってるね。だから、そこに、対応していく「大変さ」というものがあるわけ。大学でも、幼稚園でも、学校でも。昭和三〇年頃、戦後のところは、たしかに世の中は変わったんだけど。戦争に負けて、軍がなくなつて、だけど実は早すぎるくらいに日本が復興して、それで、その戦前から戦中戦後つて引きずってる何かがあると思うんですよ。それが今このところで、全部ひっくりかえっている。

**本田** すばつと切れたんですね。違うものがすぽんと



入ってきた。

津守 むしろ非常に大きな変わり目と言えるような気がする。

田代 そこへの対応の仕方が、大人自身がもう見えなくなってしまうている。メディアの影響だって、本当に大きいと思います。

本田 例えば私なんか今、大学生を教えますとね、なにしろ若い人の五〇パーセントが大学に来る時代だから、大学で直面している問題っていうのがすごくあって、それは、もしかしたらこちらの考えてる学力観がもうずれてるのかもしれないと思うんですよ。そういう意味で、今の若い人たちが、これが足りないと思えるもののがものすごく増えているのに比して、幼児の場合はそのずれは少ないのではないかって思うのね。そうするとやっぱり、一番基本的なことを大切にしまだやっていける場というのは幼児教育じゃないかって気もしますね。上に行くほど、それはすごくなっちゃうんですよ。私たちはもう、私たちが考えてることは全部、もし

かしたらずれてて、この人たちのために何をしてあげたらいいかっていうことが、全く見えてない。そんな人が教授をやってるんじゃないかという気がするんです。幼児の場合、ずれはそれほど大きくないですよ。やっぱり人間の基本的なものっていうのは、あの二〜三年の間に、きちつとするという意味では変わらないんじゃないかって気がしますね。だから幼児教育って、状況の変化の中で、一番基本的には変わらないで、一番大切なものを培える場所かって気がするんです。

津守 幼児っていうのはありがたいことに、一時間一緒に遊ぶとね、もうそれでコミュニケーションができてちやう。

本田 世界が共有できちやうですよ。



## これからの『幼児の教育』は――

津守 この頃の『幼児の教育』は、現場の方々が、書くものが、とてもいい。

本田 多くなりましたね。とてもいいですね。

津守 昔はね、現場の人に頼むのはとっても大変でした。

本田 いい保育をしてらっしゃる方も、お願いすると変なもの書いちゃうことがある。困ったことがよくありましたけど。

田代 確実な方に頼むと、いつも同じになっちゃうし。そこが難しいです。賭けのようなところもあつて。

本田 ただ、最近はやっぱりちゃんと自己を表現できる方が増えたのかなって気もしますけどね。

津守 やっぱり、それにそういう編集者のご苦勞を感じますね。

本田 そうですね。それと、一時のようにこういう雑誌が新しい情報を伝えたりする必要がなくなってきた

でしょ。だから、逆に何か考える、静かに考えるような記事が出ればいいのよね。情報発信っていうのはもう、他のことできろいろできるから。だから、『幼児の教育』の今の一番の生命線ってそこかっていう気もするの。

津守 現場の人がほんとに、これどうしたらいいのかななんて思うことをじっくり考えてくれるような、そういう記事っていうのがなかなか見つからないからね。みんな適当にうまくまとめちゃう。そうじゃくてもつと破れたままに、ありのままに、しかし、その中で何かが見えてくるっていうようなそういうことを書く方々も増えて、それからそれをそうやって引き出す方々も、こうやってちゃんと一生懸命そこを引き出そうと思つて……。

本田 書くことでご本人がたぶん見えてくるわけですよ。だから原稿依頼のチャンスは、人を育てるといふか、人の思考を深めさせるチャンスになってるんですよ。だからこの雑誌の機能って、そういうことかなって思つて。ここから何か新しいものを学ぶとかがつてい

じゃなくてね。自分の保育をどのように考えるかということ、他の人の書いたものを見ながら考える、何かそういう媒体になるのかしらって思いますけど。新しい情報のカヤツチだったらいくらだって他でできるから。

田代 なかなかやはり、それも大変なのかなと思いがら先ほどの編集協力委員のようなかたを……。あまりにも狭いところでやっているのでもうしても枯渇してしまふし。

本田 人の探し方ってむずかしい。同人誌みたいになるんですよ、どうしても。

田代 そうなんです。ただ、そうやって編集協力委員のような形で人を広げると今度また、みなさんに集まってもらう時間を作るのがとても大変になってくる。

津守 そのエネルギーは大変ですよ。それでね、倉橋先生と、ほんとにごく最初の頃、「こうやってやってると、だんだん、だんだん雑誌が、細くなってしまいかもしれませんよ」って、僕がそんなことを言うと、先生が「それでいいんだよ、売れなくてもちゃんと本当のこと

がそこに出てればそれでいいんだよ」ってそう言ったの。それで非常に、僕は力づけられたし、ああ、それでいいんだなと思った。そしたら、一〇〇巻まで続いたんですよ。

本田 売れなくはなりませんでしたけど。

田代 なかなか若いかたに広がらないので、ほそぼそと。

津守 一〇〇巻っていうと他にはないでしょう。だからこれは、大いに宣伝する価値があるわけですよ、それだけ。

本田 だいぶ前に「教育系の雑誌で、一〇〇年近く続いている雑誌は何か」って『幼児の教育』がテレビでクイズの問題になったことがあるくらいだから、他にないということでしょうね。そして、編集者が変わっても一応主張が変わらないっていうのが珍しいんですよ。

津守 それから、こうやって雑誌編集を、早くから僕なんかも言われてやったけど、どうしても自分で書けない時期っていうのがありましたね。

本田 絶えず書いてらっしゃるような印象はありますけれども。

津守 最近は心がけて。お茶大を辞めてから僕もこれ書かないと申し訳ないっていうそんな思いでね。

本田 編集者をしていた頃は、私、編集者って書く者じゃない、人に書かせる者だというポリシーがあつたんですよ。だから、その頃はあまり書かなかつたんですけど。まあ、辞めてからは、編集者のご苦勞を思つて、隔月連載ぐらい書いたほうが協力的かなと思つて書いてます。編集していると書けないんですよ。

田代 何か事務的なことでけっこう追われてしまつて、あれはどうしましょう、これはこうなつてしまひましたっていうのに。

本田 穴埋めだけですよ。

田代 それを津守先生は三〇年やられて。倉橋先生の時代はご自分で書いてしまつたというようなことがあつたっていうのは。

本田 あの頃はやっぱり『幼児の教育』って「僕」だ

と思つてらしたのでは。

津守 そういう時代がたしか数十年あつたわけですよ。

本田 そうなんですよ。今の日本の幼児の教育も「僕」で、この雑誌も「僕」っていう時代があるんですよ、倉橋先生は。

津守 それで、あの間に和田実が編集主幹になります。それから堀七蔵。『幼児の教育』は今、何なんでしょうね。

本田 一時、ちよつと津守先生も『幼児の教育』は「僕だ」ってというような顔をしかけてらしたんだけど、そのあと、私が引き継いでから、そういう顔がなくなつちやつたんですよ。

津守 そういう点では、子どもつていうと学校、幼稚園児・保育園児、それ以外の子ども顔っていうのがない時代なんです。本田



先生がよく言われるように。これは必ずしも幼稚園の先生だけのものじゃなくて、もつと子どものことを考えて、しかも幼稚園の先生にもちゃんとした本式の保育観をもつて、こういう広がり本来は持つ時代なのかしらね。

本田 そうですね。

田代 逆行して、やっぱり児童学科的に。子どもが真ん中にあつて、いろんな角度からという方に書いてもらうっていうのもこれから考えていけないのかもしれないですね。

本田 そうですね。皆川さんが編集を手伝つて下さつた時、例えば森洋子さんの「ブリュエルの『子供の遊戯』」、あれも延々と続いて結果としては立派な仕事ができた。それから、海老沢敏さんの「津守先生がラジオを聞いてらしてふつと思いついて、それで皆川さんがその話を聞いて、即座に、海老沢さんを訪ねて、書いてくださってお願いしたのが、「ルソーの夢」ですか。あれも、立派な本になった。

津守 そうです。あれはね、ラジオを聞いていてこれは本物だと思つたの。本式、本物の人をつかまえる。

本田 初めは二、三回つてお願いしたら、海老沢さんも凝り性だから延々と続いて調べ直したり、ドイツに行つたり、大変なことになつちゃつて。でももう、皆川さんは苦勞しながらつき合つて、あれも、大変立派なお仕事になりましたでしょ。美術史の森洋子さんもまさにそうですね。倉橋先生の頃、よく絵の解説が出ましたでしょ。あれ、面白いからつて、森さんにブリュエルの子どもの遊戯の絵の解説を一〇回くらいしてくださいと頼んだら、あの人も凝り性だし、何しろ、森ビルの一族でお金もいっぱいあるから、あつという間に資料を取りにベルギーに飛んでいったり、オランダに飛んでいったりして。あれ、二十回連続きました？ それで立派な本になつて、『ブリュエルの「子供の遊戯」』（未来社）、あれは賞をたくさんもらつてベルギーからは勲章までもらつたんですね。彼女は今でも、自分が一流になれたのは『幼児の教育』のおかげだと言つてらつしやるけれ

ど、そういう仕事もある時期にしてたんですね。海老沢さんの『むすんでひらいて考 ルソーの夢』(石波書店)も、賞をもらったりしてるんです。こんな雑誌じゃなきゃ、お書きにならなかつたテーマというのが、ああいう方にもあるんでしょうね。子どものことなんてのは、頼まれなければやらないけど、やってみると掘れば掘るほど面白くて、ご自分の仕事があつちやつたという方が結構いらつしやる。文化のジャンルに広げたことの喜びっていうのはそういうところにありましたけど。

津守 だからこの人、これこれって思つたら大胆に、どんどん飛び込んでいく。編集者の得ですよ。でも一〇〇巻なんて夢のようで。

田代 でも苦しい。毎月……。

津守 大変。一〇〇巻でやめちゃうって手だつてあるんですよ。

田代 なかなかやめるといふのは難しいですよ。誰が幕を引くのか……。

津守 まあ自然にくるまではやるんでしょうね。

本田 老衰するまでですか？

田代 長寿です。

津守 何でもかんでもやらねばならないなんて思わないでさ、自然に続いているものを無理してやめることもないし。

本田 長寿を祝つてということで、ご苦労様です。おめでとうございます。

田代 ありがとうございます。

— 終 —

